

2012年(平成24年)6月21日(木曜日)

## 抄遊交

思い出さえの本質に心から迫りたか  
 深ければ、いったからだろう。震災の  
 つ、どうやって出会ったか  
 後、原子力発電所で働く  
 など取るに足 上げたらどうかと尋ねた  
 らない。作家の田村喜子ら、前向きに取り組みた  
 さんはそう思わせる人だ  
 いと語っていた。

った。出会ったのは十数 だけ、それはかなわな  
 年前。多くの言葉と思い かった。3月に亡くなる  
 出をもらったが、  
 邂逅時のことはこ  
 れぐらいしか覚えて  
 ていない。

他人を思いやる  
 気持ち忘れず、  
 自分の仕事に誇り  
 を持つ。田村さん  
 が語っていた人生  
 の基本原則だ。時

## 人生の原点

直良

直前、東京都内の  
 病院を訪ねた。が  
 んだった。一切  
 の延命治療を断っ  
 たそうだ。その姿  
 に、私は「頑張れ」  
 という言葉すら絞  
 り出せなかった。  
 黙って手を握り、  
 肩を抱いた。

佐藤

に雑音の多い仕事だと、  
 この原点さえぐらつきや  
 すい。全く軸のぶれない  
 田村さんの生き方には、  
 多くを語らずとも伝わっ  
 てくるすこみがあった。  
 執筆活動にあたって  
 は、尋常でない数の人か  
 ら話を聞いていたとい  
 う。人間の機微と、物事  
 田村さんを慕い集まっ  
 ていた同志と相談してい  
 る。人生の原点と彼女の  
 意思を伝えていくにはど  
 うしたらいいか。命日に  
 よう、集まるのはやめ  
 よう、集まるのは10月の  
 誕生日にしよう、と。(さ  
 どう・なおよし 国土交  
 通省技監)